

エコバッグからRR

磐田市内小学校

佐藤さん

「6RR県民運動」と書いてある、ナイロンのエコバッグをもらった。ほくの好きな水色だったし、丁度マイバッグがボロボロだったので、大切に使おうと思いうれしくなった。

本を入れたが、10分たらずに手元がほつれ、糸がヒラヒラとれてきた。ぬい目の穴も大きくて、やぶれそう。母さんが「布が弱くてはりが太いと、布まけして穴があく」「ほつれ止めをしないと、どんどん糸が出てきてしまう」と教えてくれた。

次の日、自転車のカゴに本を入れ走っていると、エコバッグのすれた所に小さな穴がいくつもできている。すれた所も、ほつれた糸も、マイクロプラスチックになってしまうと思い、使うのはやめることにした。たった2日とはいえ、ほくの好きな水色で気に入っていたのに、とてもざんねんだった。

エコバッグが無料で配られることが多く、ほくの家にもたくさんある。ナイロンせい、コットンせい、ふしゅくふせいがある。調べていて、無料のものにはけい向があることがわかった。うすくてもろいも

のが多いことだ。

ナイロンせい、ほつれ止めがないものが多かった。生地も弱く、穴があきやすい。

ふしゅくふはボロボロになりやすい。本によると、日光でれっかしやすいそうだ。エコバッグは外で使うものだから、当ぜんれっかする。PPやPSのものは、れっかしてこなのようになり、空気中にちらばってしまう。

かんきょうにわるいことがわかっているのに、もろいエコバッグが多いのはなぜか。

「無料で配るものだから、お金をかけずに大りょうに作れるもの」と思っていないか。

「エコ」ときけばイメージはいいけれど、くり返し使えるバッグでなければ、エコではない。それにただエコバッグを作って配っているというだけで「社会にこうけんしている」というのは正しくないと思う。本当に地球のことを考えるなら、くり返し使える丈夫なもので、マイクロプラスチックにならないよう天ねんのせんで作るべきではないだろうか。

もろう方も、自分が気に入って買ったものなら「おかし」と思っけれど、「無料でもらったもの」「は」しょうがない「ですんでしまう。

そしてかたんにゴミに出せてしまう。直して使おうとまで思えないのかもしれない。

これまでうちは、スーパーのレジぶくろを何度もくり返し使っていた。丈夫なものは十回は使えていた。エコバッグが数回使っただけでゴミになるなら、エコではない。まだレジぶくろの方がましになってしまおう。

もらったエコバッグには「6R県民運動」と書かれている。3Rのところは多いが、6Rの静岡県はすばらしいと思う。だからこそ、このエコバッグから見なおそう。ほくも、いらぬエコバッグはことわったり、そざいや強さをよくかくにんして買うようにしたい。

祖父の生活から学んだこと

裾野市内中学校

目黒さん

祖父の家に行くと、机上にはチラシで折られた箱形のゴミ入れがある。昔はあまり気にしていなかったが環境問題についていろいろと見聞きするうちにこの手作りゴミ箱はエコだと思うようになった。材料はチラシだけ。立ち上がることがおっくうになってきた祖父はゴミ箱まで行かなくても済むように机の上の簡易ゴミ入れに捨てることを思いついたようだ。『チラシごみ入れ』はとても便利で祖父はよく折っておいてくれるため、私の家に持ち帰りキッチンや食卓に置き、利用している。一人暮らしの祖父がどこで折り方を覚えたのか気になったため聞いてみると、高齢者が集まる集会で教わったと言う。私も祖父に習うことにした。口数の少ない祖父だが、その時に聞いた言葉が忘れられない。

「ただで捨てるのはもったいない。」

私は小学生の頃よく家の近くにある「エコット」という施設に行っていた。その施設はエコや環境問題についてクイズや体験を通して学べる場所だ。そこには環境問題について考える際よく目にする、海に

プラスチックが大量に捨てられてビニール袋やペットボトルが浜辺に山積している、心痛む写真があった。

そこで私は二つ解決策を考えた。一つめは祖父の手作りチラシゴミ入れからヒントを得た。何ととってもこのゴミ入れの良さは古くなる、燃えるごみとして中のゴミと一緒に捨てられることだ。このことから私は新聞紙で丈夫な買い物袋を作れば良いのではないかと声を上げた。最近このスーパーもレジ袋が有料化していて、マイバッグ持参が推奨されている。以前よりは使っている人を見かけるようになったものの残念ながらまだまだだと感じる。特に男性は必ずといっていいほどレジ袋を買っている姿を目にする。一方でコロナウイルス感染者が増えているアメリカでは、マイバッグ禁止というニュースを見た。洗わないから不衛生なのだ。マイバッグは様々な場所におく。カートにセットし買い物をし、車の中では足元に置くこともある。店内の床に置くこともあるかもしれない。途中で立ち寄った先で空いた席にも置くこともあるだろう。そして最終的には家の床やテーブルなどに置かれるのだ。洗にくい素材で出来ている、もしくは洗う習慣の無いマイバッグにウイルスが付着していたら脅威となりうる。そこで私が提案したいのは、エコで一回限りの使用となる新聞紙で出来たマイバッグだ。これならば使い終わった後、燃えるゴミとして捨てら

れる。学校のクリスマスチャリティセールで販売されていた新聞紙バッグは海外の新聞を使用し、丈夫でもあり思わずお金を払いたくなる程だった。新聞紙ならばつなぎ合わせることで様々な大きさのバッグが作れるだろう。もちろんウイルスに敏感になる必要が無い時期にはマイバッグの活用も一つの選択肢だと言える。これに関しては洗濯して使うという認識も広がればなお良い。

二つ目はペットボトルの問題だ。紙コップに飲み物が注がれる自動販売機からヒントを得た。専用の水筒のフタを外し機械に入れたら飲み物が注がれる自動販売機はどうだろうか。ペットボトルの容器代を削減することもでき環境にもお財布にも優しいシステムとなるだろう。

以前、目の錯覚を利用し花壇の絵を立体的に見せる仕かけにする事で迷惑駐車を削減したというニュースが話題になっていた。人間の良心に訴えかけるような素晴らしいアイデアではないだろうか。コンビニのトイレなどで見かける「いつもきれいに使って頂きありがとうございます」という言葉には綺麗に使おうという意識を自然に生み出す効果があるのかもしれない。

以上のことからレジ付近に、または自動販売機付近に良心に訴えかけるゴミまみれの海の写真などを貼れば一人でも多くの人が綺麗な海を目指し行動を改めるかもしれない。またトイレのように「いつもマ

イバッグを持参して下さりありがとうございます」という言葉を添えるだけでも視覚に訴える効果があるのではないだろうか。

「ただで捨てるのはもったいない」―祖父の言葉がよみがえる。祖父はなかなか物を捨てない。とっておきの革靴は二十年以上も手入れをし必要な時に履いている。戦時中の物のない時代に育っているから、そのありがたみが骨身にしみているのだろう。私はまだ使える物を捨て、新しい物を買っていないだろうか。ペットボトル、レジ袋問題に関して解決するために私たちの価値観や行動一つひとつが問われてくる。祖父のように質素に生活することは物で溢れている現代を生きている私たちにとって難しいことなのかもしれない。しかし物を大切にすする心、環境に対する姿勢を改めることはどの時代においても可能な事だといえる。だからこそ、私は自分の生活を見つめ直すことが重要だと肝に銘じたい。

しせんのため「ぼくが出来るじよ

浜松市内小学校

北嶋さん

ぼくは、いつも夏休みになると、おじいちゃんとお兄ちゃんと親せきの家に遊びに行きます。親せきの家は、ぼくの家とおなじはままつ市内にあるけれど、うら川という場所で、とても山おくにあります。うら川には、川遊びや魚つりができる大きな川もあるので、ぼくは親せきの家に遊びに行くのをとても楽しみにしています。

今年も8月に、おじいちゃんが連れて行ってくれました。ぼくは、車にのっている時からわくわくしていました。

親せきの家に着くと、「いここがぼくとお兄ちゃんに

」早く川に行って遊ぼうよー!

と言いました。だから、ぼくたちは大いそぎで水着に着がえて、みんなで川に行きました。

川に着いて、水の中に足を入れると、氷のようにキーンとして、足のゆびからジンジンジンジンとつめたさが体の中につたわってききました。川のそこにはいわがたくさんあってコケが生えていました。歩くたびに「ジュッ」と音がする音が、よく見るとせ中がにじ色にかが

やいて、ヒシが黄色い魚がコケをつついていました。

ぼくはふしぎに思ったので、家に帰ってから調べてみる事にしました。お母さんといっしょにパソコンでけんさくすると、親せきの家の近くの川は「大千世川」という川で、あゆが生そくしている事が分かりました。そして、あゆは川その石についた草をいを食べるそうです。あゆはにこった水中では生きられないため、あゆが住むということは水じつうつくしさのバロメーターになるそうです。

ぼくは、川の様子を思い出しました。川のまわりにはぼくのじつべらいの高さの草が生えていて、近くにはキャンプ場もあったけれどゴミが一つも落ちていませんでした。ひら泳ぎをすると、水中にもべった時に目を開いたら太よの光がなみうって見えました。とてもきれいでした。きつと、あゆもゆうがに泳いでいるんだと思いました。大千世川は、とてもきれいな川でした。

ぼくの家まわりには、川はないけれどゴミがたくさん落ちています。おかしつつみ紙やペットボトルなどがよく落ちていて、学校帰りにゴミを見つけると悲しくなります。(もし、大千世川のまわりにもゴミがたくさん落ちていたら、あゆが住めなくなってしまうこと、ぼくはふ安になりました。

ぼくは、家の前の竹やぶでゴミひろいをしてみました。ゴミは、ま

るでわざとかくしてあるかのように、落ち葉の下にありました。ビールぶくろがいっぱいになるまで五分もかかりませんでした。

コミひろいを試みて、コミの多さにおどろいたけれど、自分が今までそれを知らんぷりしていた事にも気がつきました。コミをすてる人が一番悪いけれど、それをそのままにする人も悪いんだなあと思いました。

これからは、コミを見つけたらなるべくひろうようにしたいです。そして、ぼくの住む浜松市がもっときれいになるといいです。

トンボが飛び交う世界にするため」

藤枝市内小学校

山本さん

「夏が来た。今年もたくさんトンボに会えるぞ。」

ぼくは、一年生から毎年トンボの研究をしている。トンボが高くまで
べーんと飛んでゆく姿は勇ましい。それが、ぼくがトンボに夢中にな
る理由だ。

ある日、テレビを観ていてびっくりするニュースを知った。それは、
「アキアカネが二十一年間で、九十九・九％減少している」という内容だ
った。このままではアキアカネが見られなくなってしまふかもしれない。
い。そう思って、原因を調べてみることにした。

原因は二つあるようだ。一つ目は田んぼが減ってヤゴのすみかにな
くなっていることだ。二つ目は、田んぼに農薬がまかれて、ヤゴが死
んでしまっていることだ。

国や大人達は、この緊急事態にどんな対策をしているのかも分かった。
環境省が二〇一五年からアキアカネが減少している地域の農薬の調査
が始まった。調査で農薬がアキアカネの減少の原因かどうか証明して、
農家に農薬の使用を減らすことを理解してもらおうことが目的だ。また、

兵庫県たつの市では、地域の人が協力し合ってアキアカネの人工飼
育をしている。これらの取り組みを知って、数を減らしたのは人だけ
ど、その数を増やし救うことが出来るのも人だと思う。

ぼくは、静岡県の磐田市の桶ヶ谷沼で、ベッコウトンボを見た。ベ
ッコウトンボは、絶滅危惧種でも貴重なので見られた時はとても
うれしかった。そこで気づいたことは、ちゅう車場から沼がはなれて
いたり、草はからずにそのままにしたり、かべをコンクリートにかえ
たりせずに自然をそのまま残していた。そうやってベッコウトンボが
生きやすい環境を守っていることが、素晴らしいと思った。そう思うと
なおさらベッコウトンボに会えたことはいれなかった。

ぼくがトンボのために出来ることを考えてみた。それは三つある。
一つ目は川や池や沼に「ゴミ」は絶対に捨てないこと。落ちていた「ゴミ」
は出来るかぎり拾って持ち帰りトンボがすみやすい環境を作ること。
二つ目は、ヤゴやトンボはその場で観察して、つかまえてもキャッ
チアンドリリースすること。

三つ目は、外来種やその場所に元々いない生き物は、はなしたりし
ないこと。

この三つのことはぼくが生き物をつかまえたり観察する時に守って
きたことだ。ぼくが出来ることは小さいことかもしれないけれど、こ

れからも続けてゆくことでトンボを守るために努力してきた大人の人達の役に立ちたいと思う。

大切な地球を守るために

静岡市内小学校

森さん

私はランニングをすることを日課にしています。そのとき、自動車から出る排気ガスでのどが痛いと感じました。また、室外機から出る熱い空気が環境に悪いのではないかと思いました。その日から、環境のことについて考え始めるようになりました。

私が実際に環境とふれあった出来事は二つあります。

一つ目は「全国百万人ゴミ拾い三保松原」に参加したことです。世界遺産である三保松原ですが、砂浜には沢山のゴミが落ちていました。特に多かったのは、海の生き物が多く被害を受けているプラスチック製の袋です。世界遺産である場所なのに、なぜこんなにゴミが落ちているのかなと思いました。観光客に楽しんでもらうためにも、ゴミ一つ落ちていない砂浜にするべきだと考えました。

二つ目は、「渚の植物観察会」です。海岸にあるたくさんの植物を探しました。初めて見る植物やとてもきれいな植物があり、感動しました。その美しい自然を守りたいと思いました。この体験でゴミ拾いをするのも大切ですが、美しい自然とふれあっていくことも、環境を守っていくうえでとても大切なことであると感じました。

私が考えた環境保全の意義は、これからも生き物に安全な環境を保つことです。自然は、さまざまなことを楽しませてくれるし、動物たちが住む、大切なところだからです。

そのために、対策・実践活動は次のようなことを行うといいと思います。

まず、地球温暖化では、電気をむだに使わないように呼びかけることです。その内容はエアコン・照明など必要ないときは使用せず、大切に使うことです。

次にゴミ問題では毎日ゴミ拾いをしながら登校することです。そして、月に一度登校するまでに拾ったゴミの量を量り、一番重かった人が学校の環境大臣になるという取り組みをすればいいと思います。そうすれば、楽しくゲーム感覚で地球をきれいにできる効果があると思うからです。

また、地球温暖化とゴミ問題のことに付いて、ポスターの掲示・パンフレットの配布をすれば、環境を大切にしようと思う人が増えてくると思います。内容は、現在の状況、地球温暖化の原因、ゴミによる被害、私達にできることです。ポスターを掲示すればいろいろな人が見てくれると思います。しかし、家で実際に取り組みという人は少ないかもしれません。そこで、パンフレットを配れば、危機意識が高くなり、実際に取り組みと思う人が増えてくるでしょう。

これらのことを行って安心・安全に過ごせる環境にしていきたいと思います。私達人間が環境を悪くしてしまったので、その責任をもつて取り組んでいきたいです。将来は、環境問題がない地球にしたいです。そして、この地球が緑あふれる豊かな星になることを願っています。

共に考えよう 環境問題

浜松市内中学校

井上さん

みなさんは環境問題について実際に行動を起こしたことはありますか。

近年、地球温暖化という言葉をよく耳にする。大雨や猛暑、台風など様々な気候変動の原因の一つとして地球温暖化も挙げられる。ニュース、新聞などで誰もが一度は耳にしたことがある言葉ではないだろうか。地球温暖化という言葉は、今や教科書にも記載されており「常識的な知識」となっている。

しかし、環境問題に関する記述は、教科書の数ページ、授業の数時間で終わってしまっているのが現状であり、多くの人が実際に行動を起こすきっかけになっているとは考えにくい。そのため、環境問題や地球温暖化について、もっと深く理解してもらうために、実験を中心とした、企画講座を昨年の七月末に浜松市の協力を得て開催した。

実験では感じにくい、海面上昇の再現実験や二酸化炭素と酸素では、どちらがより温まりやすいのかを確認する比較実験を行った。さらに、経済発展に伴う、二酸化炭素の排出増加量の一例として、人の

息に含まれる二酸化炭素を見る実験をした。その他にも、地球温暖化への行動を起こすきっかけとして、打ち水による気温の変化と体感温度の変化を体験してもらった。イベント終了時、参加者にクイズ形式でのアンケートを実施した結果「温暖化について、深く理解することができた」や「打ち水など、すぐにできることがあり、驚いた」などの感想をいただいた。実際に行動し、伝えることができ、イベントの効果は期待できた。

このようにして、地球温暖化への知識・理解を深め、行動に移してもらうべく、活動した。今年も開催を試みたが、新型コロナウイルスの流行により、開催・企画を行うことができなかった。

そのため、今年は何ができるのかを原点である環境問題に戻って考えた。すると、環境が悪化しているというインターネット記事が多いことに気付いた。書籍を確認すると、環境が改善している実例が紹介されていることもあるため、過去から現在の変化したデータに着目して環境問題を考察している。参考になりそうな書籍を探していたところ「FACTFULNESS」という本に出会った。話題になっている本である。環境についての記述があり、そこには「人々の環境への意識は、他の世界規模の問題に比べて非常に高い」というように書かれていた。十四ヶ国で実施した、環境に関するクイズの平均正解率は八十六パー

セントもあるのだ。十人のうち、八人以上は、地球温暖化について理解しているということだ。ここから、地球温暖化への人々の理解度は高いと私は判断した。今年は、データやインタビューを基に環境について多くの人に深く理解し、行動に移してもらえるように計画を進めている。

また、新型コロナウイルスの流行により、地球環境は良くなっているという。人の移動が減り、二酸化炭素の排出量が大幅に削減された。良い事の少ない新型コロナウイルスだが、地球には少し優しくなったかもしれない。そして七月からは、ビニール袋の有料化が始まった。買い物では、一人一人が思い思いのマイバッグを持参し、色とりどりのバッグを持つ人々が行き交うようになった。これは、多くの人が意識している証拠であり、エコだと思う。

地球温暖化や環境問題は、多くの人が理解し、意識していかなければならない。世界中の人々が協力していく必要がある。対策を「対策」ととるか、それとも「新しい暮らし方」ととるかで変わってくるのではないか、と考える。私の考える新しい暮らし方とは、地球に優しい、生活を楽しむ暮らし方のことだ。例えば、ビニール袋の有料化により、多くの人がマイバッグを持参する。そこで、可愛いバッグ、かっこいいバッグ、高機能のバッグなどお気に入りのバッグを選ぶことを楽

しめる。普段、車で行くところを歩いてみると、綺麗な花が咲いたり、美しい景色に出会えたりと、新しい発見をするかもしれない。そのように、生活を楽しむ暮らし方が、地球を守ることにつながる。地球を守ることが、生活を楽しむきっかけにつながる。多くの人がこの新しい暮らし方になっていけば、環境は少しずつ良くなっていくと考える。環境問題はテクノロジーで解決することは難しい。私たちは、技術の進歩のために、地球に負担をかけてきたのではないだろうか。もう一度、自身の生活を見直してみませんか。

共に考えよう 環境問題

農薬から二ホンミツバチを守ろう

静岡市内中学校

久村さん

「二ホンミツバチ」という昆虫を知っているだろうか。彼らは、太古から日本に生息し、野山の植物の受粉に貢献してきた、在来種のミツバチである。

「ミツバチ」と聞くと、誰もがスズメバチやアシナガバチのような攻撃的な虫を想像してしまうことだろう。しかし、二ホンミツバチは実はとても温和な性格で、飼育すると飼い主の顔さえも認識できる、非常に賢い生き物なのだ。僕はこの二ホンミツバチを四年間飼ったことがある。

日頃の食生活でよく口にすると、レンゲやクローバーのハチミツは、ヨーロッパ原産の改良種であるセイヨウミツバチが集めた蜜だ。彼らは蜜を沢山集めるよう品種改良されているが、病気や天敵には弱いため、人の手によって飼育されることで命をつないできた。

それに対して、二ホンミツバチは全くの野生種で、野山から街にまで生息し、木の洞や古い墓地など様々な場所で巣をつくる。ありとあらゆる花から蜜や花粉を集め、受粉の手助けをすることで、日本の野山の生態系や自然を守り続けてきたといっても過言ではない。また今

では、日本の農業に欠かすことのできない大きな役割を担っている。

僕が初めて二ホンミツバチに出会ったのは、小学三年生の時のこと。ある日、友人のお父さんが飼っている二ホンミツバチを見に行ったのがきっかけだ。

僕は生き物が大好きだが、ミツバチは正直なところ怖かった。でも勧められ、静かに巣箱に近寄ってみた。

すると群れの羽音がざわついて、二匹のハチが飛んできた。僕はしばらく言われた通りに、じっとしていた。すると、彼らは再び巣に戻って行った。数秒後には、巣のざわつきは消えた。友人のお父さんによると、二ホンミツバチは巣に近づく相手を観察し、味方だと判断すれば刺してこないそうだ。さらに、彼らはその情報を群れの中に一瞬で伝えることもできるそうだ。僕はそれを聞きとても驚いた。それほど知能の高い昆虫がいるとはとても信じられなかったからだ。人間ですら、そんな情報伝達能力は持っていない。

僕は二ホンミツバチに強い興味を抱き、飼ってみたいと考えた。空の巣箱を借りて、近くの山に設置した。そして、桜の花が散るころに巣分けする野生の群れを待った。

四月の終わり頃、数匹の偵察の二ホンミツバチが僕の巣箱にもやって来た。僕は群れが来るのを期待し、わくわくしながら日に何度も待ち箱を見に行った。

その数日後、巣箱を見に行くと、どこからかうなるようなもの凄
音が聞こえてきた。それはミツバチの羽音だった。そして空から金色
の雲が現れた。雲は僕の巣箱に吸いこまれるように次々と入ってい
た。その光景は、今でも脳裏に焼きついている。その後も多くの群れ
を飼ったが、この場面に遭遇することができたのは、これ一度きりだ。
しかし、彼らとの別れはある日突然やってきた。

昨年7月頃のことだった。僕の二ホンミツバチに異変が起こった。
蜜を取りに行った働き蜂が帰らず、また、巣箱の周りに死んだ蜂が多
く見られるようになったのだ。生き残った蜂の中にも、弱ってのたう
ち回っている者が何匹もいる。僕はそれを見てとても心配になり、餌
の砂糖水をあげたりした。しかし効果はなかった。三群の二ホンミツ
バチは、数日のうちに全滅してしまった。後には、蜜の入った真新し
い巣を残して。

僕にとって二ホンミツバチは家族同然の存在だった。あつという間
の別れに僕は呆然とし、深い悲しみに暮れた。

友人のお父さんにすぐ連絡をした。すると、彼のところでも、この
二、三ヶ月中に三分の一近くが、同じように全滅してしまったという。
僕はあまりの事に、啞然としてしまった。

二ホンミツバチを短期間のうちに死に追いやった犯人を特定するた
め、僕は本やインターネット、二ホンミツバチのネットワークを使い、

調べに調べた。

その犯人は、農薬だった。蜜を残して死に絶える様子や、働きバチ
がのたうち回る行動が決め手だった。

近年多く使用されている、ネオニコチノイドという農薬が、ミツバ
チに悪影響をもたらしている犯人だ。この薬剤はミツバチの神経を破
壊する。そのためこれが一度散布されると、半径二キロメートル以内
のミツバチは全滅するか、弱ってしまう。

更にネオニコチノイドは、毒性が高いことだけでなく、非常に残留
性が高いことでも有名だ。

一度散布された農薬は、普通数ヶ月で分解される。しかしこの農薬
は、土壌や地下水に浸透し、無毒化されるには何十年という年月を要
するのだそうだ。

ミツバチに被害が及ぶ原因は、その用途の広さにもある。この農薬
は、農家ではミカンやナシなどの果樹、コマツナやホウレンソウなど
の野菜、更にはイネに至るまで、ほとんどの作物に使用される。また、
松林、公園の木、街路樹、花壇に至るまで、どこにでも散布されてい
る。

もし二ホンミツバチが絶滅したら、日本の農業は崩壊する。何十ハ
クターにも及ぶ果樹の受粉を、人の手で行うことになるからだ。実
際に世界にはそうした地域が広がりつつある。既に中国や韓国の一部

でもそうだ。

こんなことにならないようにするために、僕は毒性、残留性の低い農薬の使用を義務づけるべきだと考えている。欧米では既に、「脱ネオニコチノイド」の動きが始まっている。日本でも規制を強めていく必要があるのではないだろうか。僕は有機栽培の野菜を食べている。皆さんにもそうしてほしい。

また、僕は農薬の使い方を見直すべきだと考えている。もし作物に害虫を見つけたら、その天敵である鳥を呼ぶことができる。アブラムシが発生したら、その天敵のテントウムシを放すことができる。また、街路樹や公園の木にも徹底して農薬を撒こうとするその姿勢にも疑問を覚える。自然とは、昆虫、鳥、植物、全ての生き物を含めて成り立つものなのだ。昆虫が姿を消すと、鳥の姿も消える。鳥の声も聞こえず、ミツバチの羽音も聞こえない。そんな町を僕たちは求めているだろうか？

二ホンミツバチを守るため、日本の農業を守るため、ネオニコチノイドに声をあげよう。残された時間は、もう長く存在しない。

プラスチックと環境問題

島田市内中学校

田上さん

レジ袋の有料化が始まり、私のよく行くパン屋でもそれは例外ではなかった。

いつも当たり前に入れられた手提げ袋がもらえないことでこんなに不便な思いをすることは思わなかった。

そこで、レジ袋の有料化が始まった原因を調べることにした。

その原因はプラスチックによる環境破壊が背景にあることがわかった。

私たちの周りにはありとあらゆるところにプラスチックが使われている。現代人にとってこのプラスチックの利便性はもはや手放せないものとなってしまっていないだろうか。当然、環境問題をないがしろにするわけではない。

環境問題として、世界中でマイクロプラスチックの問題が叫ばれている。

マイクロプラスチックとはプラスチックが細かく分解されたものである。

果たしてプラスチックは「悪」なのか。

マイクロプラスチックによる海洋汚染に代表される問題は、プラスチックそのものではなく、廃棄方法にあるにも関わらず、テレビではあたかも「レジ袋」「ストロー」が悪いかのように報道をしている。

三十年ほど前、私がまだ生まれる前のことだ。プラスチック、中でも塩化ビニールのダイオキシン問題に日本が過敏に反応した。この時も同じように塩化ビニールだけがダイオキシンを発生するかのようなことを言い、低温燃焼によって紙でさえダイオキシンを発生することなどはほとんど説明されなかったようだ。その結果、「非塩ビ運動」が起こり、多種多様なプラスチックが人々の生活に入り込み、それと共に全国に溶鉱炉タイプの焼却場が普及した。そして、日本におけるプラスチックのサーマルリサイクル率が五十パーセントを超え、世界でもトップクラスに進んだ。

発展途上国はもちろん、欧米でさえも、プラスチックごみは主に埋め立てられている。そのような観点から、生分解プラスチックがトレンドになるのも理解できる。

しかし、土に埋め、長い年月をかけて微生物による分解がなされても、結局は残留物質、マイクロプラスチックの発生は避けられない。体積が減るだけだ。物を燃やすことでエネルギーが大量に発生すると

いう理由からサーマルリサイクルを本当のリサイクルだと認めない一部の人もいるが、例えば、プラスチックやアルミのリサイクルには新規にその製品をつくるよりも多大なエネルギーを要する。そのため、決して環境負荷が少ない訳ではない。つまり、あらゆるリサイクルにはポジティブな要素だけではなく、ネガティブな要素も存在する。唯一、環境に低負荷なこととすれば、「リユース」に他ならない。

では、人々は古くなったとしても、多少壊れていてもモノを使い続けることはできるのだろうか。

レジ袋が有料になり、「要らない」と断る人の割合が高まったという。これには意味がないという声もある。私は環境負荷について考えなければこれは意味を果たさないと思う。タダなら貰う、有料なら貰わない。これは、私たちが日常、無意識な行動をいかにしているかを象徴している。ごみはその辺に捨てられてやがて、風に飛ばされ、海に流れ着く。

ビニール袋をクラゲと間違えてカメが喉を詰まらせて死んでしまう。哺乳類最大のクジラもプラスチックごみで胃が一杯となり、えさを食べられず、餓死してしまう。

アザラシは砂浜に遺棄されたプラスチックの輪や釣り糸などに絡まり、絞殺されたり、海底に沈んでいる漁具に引っ掛かり、呼吸が出来

ずに窒息死したりする。

魚たちはプランクトンと間違えてマイクロプラスチックを飲み込んでしまう。そして、その魚を食べてしまっていることに気づいていない私たち…。

プラスチックごみの約九割が海へ流れている。そして、一億トンのプラスチックごみが投棄されているのが現実なのだ。私たちはこの現実から目を逸らしてはいけない。向き合わなければならない。

最近の話題は新型コロナウイルスの影響でマスクをする人が増え、それに伴い、世界中のいたるところに落ちてしまったマスクがごみとなってしまっていることだ。

私たち、人間の最大の敵は自分たちが放り出したごみだったのだ。要するに、環境に悪いと言われているものを減らすことだけではなく、本当の環境汚染の原因とは、人々のごみの廃棄方法である。一人ひとりが自分の行動で自然を汚していることを自覚し、ごみの廃棄方法を改善しなければ、いつまで経ってもこの環境問題が終わることはない。

これは私たち人間のモラルの問題だ。